

かずさの博物誌

タシギ ～とぼけ顔のシギ～

文・写真／成田篤彦

2015.1.20

ここは真冬の上総の湿田。
畦道にタンポポの花が一輪、咲いていた。

「ジェ」と一声。

ハト大の茶色の鳥が、足元から飛び立った。

「長いくちばし。六〇七センチもあるだろうか？タシギだ。」

猛スピードで左右に揺れながら、遠ざかり、アシの湿原に降りた。

「こんな近くにいたの？」といつもながら、びっくりさせられる。

こんな句がある。

人に驚いて鷗立って人は驚きぬ

河東碧梧桐（風信子二〇〇八

「俳句と詩歌であるく鳥の国」

文一総合出版）

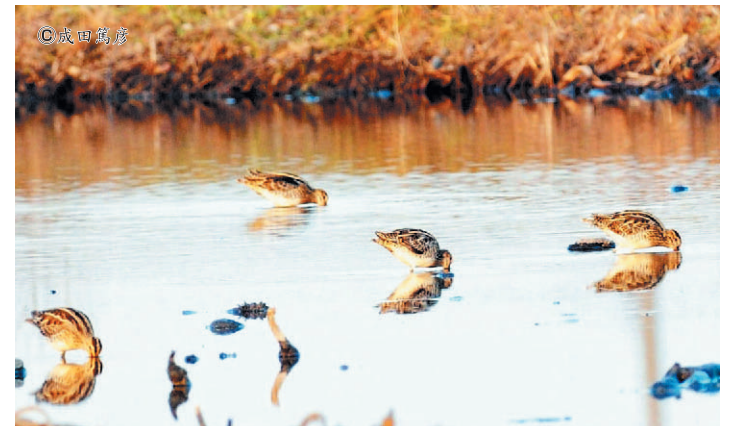
タシギに驚かされるのは私だけではないようだ。

タシギはえさを捕る時以外は畦の側や日陰にいて動かない。羽の色は枯れ草や土の色に溶け込む。



©成田篤彦

▲えさを探すタシギ 日本では繁殖しない。上総では冬に多く見られる＝2010年2月8日 木更津市



©成田篤彦

▲タシギの採食 主に夜間活動し、ミミズなどを食べる

＝2011年1月24日 木更津市

俗人の住むこの世の中から離れた私であっても、鴨が飛び立つ沢の夕暮では、深くこころにしみる感動があるものだ。

この和歌は「秋の夕暮れ」と結んだ三つの名歌の一つとして有名だ。

異論はあるが、この和歌のシギはタシギだと言う人が多い。

その理由の一つがタシギは夕暮れになると活発に活動するからだ。

外にタシギを詠んだと思われる和歌や俳句がたくさんある。

昔は湿田に囲まれて生活していたから、タシギは山ほどいたのだろう。

しかし、現在、上総でもタシギが来る湿田はとも少ない。

かつての歌人がタシギをモチーフにして多くの名歌、名句を作った。その鳥が来る場所が無くなっていくのは残念である。



©成田篤彦

▶飛ぶタシギ 低くジグザグに飛ぶ

＝二〇一五年二月十日 木更津市

memo

タシギ

チドリ目シギ科

全長二十七センチ。アジア大陸を中心に生息。日本では春と秋の移動途中に飛来するものが多い。

上総には八月下旬頃から飛来し、翌年五月中旬頃まで各地の水田湿地等で、数羽～十数羽の群れで見られる。また、越冬するものもいる。